

授業外活動から得たのは？

蘭 紅艶

What Do Students Gain Through Extracurricular Activities?

Hongyan Lan

I . 序文

日本経済団体連合会による新卒者（2014年4月採用）の採用選考で重視した会社が多い上位3項目は、第3位チャレンジ精神52.9%、第2位主体性61.%、第1位コミュニケーション能力82.8%でした。これらの3つの概念は、定義がそれぞれの企業において異なると思われますが、一般的な意味において、近年の学生達が弱くなったものばかりです。

社会人になるまでの4年間でこれらの資質を高めていくために、授業に専念させるだけでは知識習得のみに終わり、行動に移す時間が不足していますし、生徒自治会活動、部活動、ボランティア活動あるいは地域の活動に委託するだけでは、個人差が大きくなります。指示されたことしか行動に移さない「主体性がない指示待ち人間」が増えている時だからこそ、新しい事へのチャレンジの第1歩は教師からの後押しが必要です。学科として、全生徒に授業外のイベントに参加するように激励し、「初めて取り組む事業には戸惑いもあり、他人と協力して行事を遂行するのは容易ではないこと」を体験させながら、1年次、2年次、3年次のそれぞれの時期に自分達の成長度合いを確認させ、不足分野を補強させ、さらに意識的に訓練すべきことを提案していくことが必要でしょう。

本稿は国際キャリア学科（ICD）の一年生が2015年度の授業外活動を通して、どのような意識の変化があったのかを学生自身の言葉でまとめました。1年次では、意識の変化が重要であり、数値的な集計による活動の是非論ではなく、自己認識の度合いを拾い上げるために、記述式のアンケートを使用しました。生徒自身

の言葉による成果と反省から生徒の現状を把握し、Ⅳ考察では企業が求める資質を高めるために何をすべきかをまとめています。今後の教育活動に役立てれば幸いです。

Ⅱ．方法

アンケート調査対象者は国際キャリア学科2015年4月1日入学生として、ネパールから2名、中国から2名の留学生を含む81名。1年生全員が履修している必修科目の開始時に各担当教員に配布していただき、1週間後にメールボックスに提出するようにお願いしました。有効回答者51名分を解析しました。

調査対象の学科イベントは次の5つとしました。

- 1．5月27日（水）ネパール地震チャリティ・コンサート
- 2．6月29日（月）ネパール地震チャリティ・ヨガ
- 3．10月23日（金）24日（土）葡萄祭
- 4．12月16日（水）クリスマス・タレントショー
- 5．その他、独自の社会活動

アンケートでは、各イベントについて以下の4つの共通質問をしました。

- ① 参加した場合はどんなことをしましたか。
- ② 参加しようと思った理由は何でしたか。
- ③ 参加した後自分にどのような変化を感じましたか。
- ④ 今後同じような活動に参加する理由は何ですか。

Ⅲ．結果

1．ネパール地震チャリティ・コンサート

2015年5月27日（水）に、ネパール地震被災者のためのチャリティ・コンサートを企画しました。4月25日に起こったネパール大地震では8000人を超える死者と21000人を超える負傷者を出す大災害となり、国際キャリア学科へのネパールからの留学生二人とご家族も厳しい現実に直面しなければならない状況でした。このような背景で留学生を元気づけ、ネパールの応援を目標にチャリティ・コンサートを企画しました。

最初は「人前で踊ったり歌ったりするほど上手くない」と大半の生徒は消極的でしたが、「上手下手は別にしてクラスメートを勇気付けましょう」と助言したら、多くの生徒がコンサート発表者として名乗りをあげました。「歌は歌えないですけど、調理は少しできますけど」と確認に来たので、「歌よりも美味しい料理のほうが元気になるかもしれませんね」と伝えると、他の分野からも参加が来ました。ダンス、ピアノ独奏、ピアノとサクソフォン協奏、ピアノ伴奏バレエダンス等を披露しただけでなく、書道、花飾り、プレスレット、ケーキなどをネパールからの留学生にプレゼントして、元気づけようとしてしました。

有効回答者51名中2名がこの行事に不参加で、他の49名が発表者もしくは聴衆として参加しました。①参加形態、②参加理由、③自分への影響、④今後の予定で解析します。

① 具体的にしたことは以下の四つに分けられます。

- A．舞台出演
- B．書道・絵画作品贈呈
- C．花飾りなど手芸作品贈呈
- D．会場用料理の手伝いと片付け

② 参加しようと思う理由

この質問に対して2名が未回答で、残りの47名は参加したい理由をA元気づけ、B国際交流、C共同作業の3点から述べています。

A．元気づけ

留学生に元気をつけたい、友達として役に立ちたいという理由がほとんどでした。「ネパール大地震は他人事ではなかった。自分に何か少しでもできることをしたいと思ったから。」同じ学科内に被災国の留学生がいることは、災害を身近なものにし、慈善行動に駆り立てました。

B．国際交流

「ネパールについての知識が増える機会だと思った。」「留学生と交流できる機会だと思ったから」。入学してまだ2カ月。留学生を見かけても話すことがなかったのに、今回の事でネパールの人と文化を知る良いきっかけになったと報告しています。

C．楽しさ

皆が一緒に何かやることでそれぞれの特技を出し合って、より理解しあう

ことができ、仲良くなれるのが楽しいという報告もありました。

③ 参加した後自分にどのような変化を感じましたか。

活動に参加したことで自分自身に変化を感じる学生が19名いました。未回答が2名で、「わからない」と選択したのが28名で、2名が「変化なかった」でした。変化については主に自分の変化と自分と他人の関わりという二つに分けることができました。

A . 自分

自分の変化としては自信、積極性、共感、人を助ける気持ち、世界に対する関心として挙げられました。ある学生は「以前人前に出ることが恥ずかしかったが、みんなの前でダンスをしたことで、人前に出ること抵抗がなくなった」と自尊心が高まったと報告しました。もう一人は「何でも良いから“何かすること”ってすごく大事なことなんだ、と実感した」と積極性の効能を理解しました。留学生の発表を聞いて、自分の勉強について反省した生徒もいました。「留学生が日本語を学習した期間や英語を学習した期間は、私が英語を学習している期間よりもはるかに短いことに驚き、もっと英語に熱を入れて頑張ろうと思った。」「留学生は、自分の家族や国から離れて一人で日本で頑張っているし、特にネパールの厳しい状況の中でも、一生懸命頑張っている留学生を見ると、自分の努力はまだまだ足りないと思う。これからももっと頑張っていきたいと思った。」

また「周りに対する気持ちや支援の心が生まれた。もっと周りに目を向けること。」や「小さくてもいいから少しでも自分にできることをやっという気持ちになった。」と他人に共感する、助けると気持ちが出てきました。「海外について(ニュースなど)以前よりも関心を持つようになった。」や「世界に目を向けるようになった。」という報告もありました。

B . 他人とのかわり

このイベントを通して他人との関係にも良い変化が見られました。「仲良くなれた」、「準備をするときからとても楽しかったが、本番を終えた後のみんなの笑顔と「ありがとう」という言葉をもらってまたやりたいと思った。」「留学生からの「ありがとう」がとても響いた。」「発表している人は勇気があるし、思いっきりがあるし、見ているとパワーをもらえと思った。」というようなコメントが多くありました。

④ 今後同じような活動に参加する理由は何ですか。

この質問に関して未回答が2名で、「時間があまりない、バイトや予定が多い」という理由で「しない」と選んだのが2名でしたが、他の47名はまた参加すると回答しました。主な理由は以下でまとめました。

A．チャンス

多くの参加者はこのイベントを自分にとってチャンスという見方を示しました。「このような機会を無駄にしたくないから。」「自分にとって何かのきっかけになると思うから。」「参加することで自分の心境に変化があるかもしれないから。」「参加することで他の何かを吸収することができるかもしれないから。」「みんなと仲良くなれるいい機会だから。」「いろいろな人と仲良くなる機会だし、楽しいから。」「普段授業で関わらない人たちとも交流するいい機会にもなるから。」

B．自分と他人のつながり

自分にとっては他人とのつながりが強くなり、仲が深まり、助け合うことが大事だと言う学生が多くいました。「楽しいし、皆と交流できる。」「みんなの新しい一面を見られるから。」「友達が困っていたら助けるのは当たり前だから。」「この活動で元気になる人がいるなら自分も元気になりそうだから。」「日本でも震災は多くあるし、お互いに助け合うことは大切だと思うから。少しでも役に立ちたいから。チャリティ・コンサートが誰かのためになるものなら参加すると思う。皆で応援できるのはいいから。」「大学で学習とは本の中身の内容ではなく、人との出会い、または頑張りも大切だと思う。また同級生、クラスメートとして、周囲の友達や友人が困っているとき、一緒に協力し、克服や応援することも人間関係ではなく、仁義的でも大切、大事なことだと思う。」

その上、自分の成長も伴うと思うコメントもありました。「自分の視野が広がるから。」「自分のためになりそうだったから。」「みんなの発表を見るのもたのしいし、ICDの仲がさらに深まると思うから。」

まとめ：

時間が限られた中、学生が積極的に参加していました。各自に留学生のために自分のできることをしていました。絵画が得意な学生が絵を描いて留学生に渡しました。書道が得意な学生が自分の気持ちを文字を通して“愛”や

“ 平和 ” を伝えました。歌やダンスや笑い番組などで盛り上がりました。他にクッキーやケーキを焼いて渡しました。

ネパールの留学生も自分の国と現状について報告しました。家族が厳しい現実の中、二人は自分と自分の家族にではなく、ネパール全体のために何かできないかと呼びかけました。留学生と深く触れ合う機会がないので、今回の交流を通して学生同士の繋がりが強まりました。また少しでもネパールに応援しようと思い、募金活動に参加した生徒もいました。

2 . ネパール地震チャリティ・ヨガ

ネパール地震チャリティ・コンサートに引き続き、2015年6月29日(月)には、チャリティ・ヨガ教室を開催しました。この教室は国際キャリア学科オリエンテーションで講演してもらった Fazilah Bazari 先生のご協力をいただきました。ヨガを体験することで、自分と対話して、心を清めることができ、また参加費を募金としてネパールへ寄付しました。

今回のチャリティ・ヨガ教室は学生中心に運営してもらって、時間の設定、場所の確保、ポスターの作成と呼びかけ、マットの運びなど全て学生がやり遂げました。

回収した51人のうち10名が運営や体験などの形で参加しました。他未回答もしくは参加しないと答えた学生は時間が合わなかったこと、またヨガにあまり興味がないと説明しました。実際の参加者が20名程度でしたが、以下はアンケートに答えた10名参加者のみのまとめになります。

- ① 参加した場合は具体的にどんなことをしましたか。
具体的に運営の手伝い、ヨガマットの準備・片付け、ヨガ体験でした。
- ② 参加しようと思った理由は何でしたか。
多くのは興味があったからと説明しました。ほかに「運動したかった」や「前からしたこともあって健康的だと思ったから」もありました。
- ③ 参加した後自分にどのような変化を感じましたか。
変化としては「心が落ち着いた。気持ちがらくになった」「楽しかった」、「次の日くらいに軽い筋肉痛があったので、日常の運動不足を感じた。」「数年間全くしてなかったヨガをまた一週間くらい続けられた。」
- ④ 今後同じような活動に参加する理由は何ですか。

理由として「楽しかった」、「楽しそう」、「満足できた」以外に、「ヨガが他の運動と違って、体だけではなく心にも良い効果があるから。」「新しい発見があるから。」「自分が上手じゃない分野でもチャレンジすれば自分の知らないことを見つかることができると思う」もありました。

まとめ：

今回のチャリティ・ヨガ教室はチャリティ・コンサートの続きであり、ネパール復興のための応援の一環でした。チャリティ・コンサートと違ったのは、学生が主体になって企画・運営をしたことでした。興味を示す学生が中心になって最初の企画、日時や場所の設定、宣伝、当日の会場設置、実施、片付けなどを行いました。当日は約20名がヨガ教室に参加しました。このヨガ教室ではヨガ講師との時間調整に時間がかかり、時間決定後に全学の学生に呼びかける時間が不十分で、参加したかった学生も別の予定が入っていたなど、最終的には計画時の予想より参加者は少ないという反省点がありました。

3. 葡萄祭

2015年10月23日（金）と24日（土）福岡女学院大学の葡萄祭が開かれました。この葡萄祭関連では、部活動あるいは個人による模擬店出店と、招待客の特別コーナー出店の二つの体験から分析します。

パプア・ニューギニアからの特別講師のコーナー

パプア・ニューギニア（Papua New Guinea）から Allan Mogerema さんを招聘し、ヨガ教室と絵画教室コーナーを設置しました。学生主体の葡萄祭なので、学生自治会への助成金確保のためのプレゼンテーションから、Allan さんとの打ち合わせ、本番当日の運営などを学生に担当してもらいました。

Allan Mogerema さんは、Fazilah Bazilah さんの愛弟子で、パプア・ニューギニア経済における中心的な産業である鉱山会社で、職員研修としてヨガを教えています。ボランティア活動として社会下層の人々にヨガを教えています。同時にドット・ペインターでもあります。多くの民族から構成されているパプア・ニューギニアを紹介してもらうために、民族衣装をまともしてもらいました。パプア・ニューギニア人に会う機会はめったにないので、盛り沢山の企画になりましたが、ヨガ教室、ドットペインティング教室、そして民族衣装の紹介を通して、南太平洋に

ある文化に触れあう機会としました。

PNG (Papua New Guinea) には800種類の言語があり、テレビ・新聞・教育・国会では公用語のひとつとして英語が使われています。学生たちが Allanさんとヨガやドットペインティングで交流する時には英語を使うことになりませんが、同じ単語を使っても、生活習慣や文化の違いによって、伝わる意味も違ってきます。長く日本で生活してある英語の先生と異なり、日本人の性格や習慣も知らない Allanさんと意思疎通を図るには、何度も確認しなければなりません。これは非常に面倒であり、ストレスが伴いますが、異文化コミュニケーションでは避けて通ることができないプロセスです。キリスト教を中心とする欧米社会、儒教思想を中心とする東南アジアとは全くことなる異質な文化との出会いは生徒には大きな刺激になった筈です。

① 参加した場合はどんなことをしましたか。

助成金のプレゼンテーション、絵画教室での必需品買い出し、同日の運営、ヨガの参加とドットペイントでのお客様の対応などがありました。

② 参加しようと思った理由は何でしたか。

理由としては「ヨガが純粋にしかかった。」「ドットペイント・ヨガに興味があった。」「また Allan先生と交流したいと思ったから。」

③ 参加した後自分にどのような変化を感じましたか。

「Allan先生との会話の体験はとても良いものでした。」「自分たちの力で作り上げていくことの素晴らしさを感じた。」「任された仕事だけでなく、自分からしようとする積極性が芽生えた。」

④ 今後同じような活動に参加する理由は何ですか。

「学生時代にしか体験できないことだから。」「自分たちで何もかもすることで成長することができるから。」

葡萄祭参加（模擬店出店）

① 参加した場合はどんなことをしましたか。

具体的にしたことは四つとして挙げられます。

- A．料理作り・販売
- B．物作り・販売
- C．演奏・演出

D．運営と他

② 参加しようと思った理由は何でしたか。

参加した理由をまとめると、内的意欲 / 理由と外的要因 / 理由がありました。

A．内的な意欲・理由

内的な意欲としては「せっかく学園祭があるので何かしたいと思っていたから」、「何か大学生活で思い出に残ることがしたいと思ったから」「友達との仲を深めたかった。」など良い思い出作りが多くありました。同時に、「自分の絵を見て喜んでくれたり、褒めてくれたりする人がいてくれたから」、「ハンドベルを一人でも多くの人に知ってほしかった」、「来客に民族衣装を試着してもらって、少しでもネパールの文化を紹介したかった。」「カンボジアのツアーに参加した後で、葡萄祭で少しでも売り上げに貢献し、少しでも多くの子供達の助けになればと思ったから。」など理由は様々でした。

B．外的な要因・理由

外的な理由としては「サークルに入っているため」、「手伝いがほしいと誘われたから。」「くじで当たったから」などがありました。

③ 参加した後自分にどのような変化を感じましたか。

変化として自分と他人との関わり二つ分けられました。

A．自分

自分の変化としては「周りの人の事を考えるようになった。」「自分の担当する企画を通して責任感を持つ大変さを学ぶことができた。」「今まで自分一人で作り上げていたけど、皆それぞれ自分の得意分野で参加すれば短時間でより良いものが作れるということが分かった。」「少人数でも頑張ってみたらできるんだと思って自信がついた。」「なんとなく人前に出ることに對して恥ずかしさがなくなった気がする。」「普段積極的に行動することができないのですが、この経験を通して積極的に行動する大切さを学んだ。」「人のために役に立っているという充実感」など多くの感想がでました。

B．他人とのかかわり

他人との関わりについては以下のように報告されました。

「友達が増えた。」「交友関係がスムーズになった。」「クラスやバイト先以外のお客様に、自己流の接客で喜んでいただけた。」「自分たちで出店することで運営側の大事さが分かった。」「自分一人で抱え込まずに人に頼ることも

大切だと思った。」

④ 今後同じような活動に参加する理由は何ですか。

A．内的な要因

自らやろうとする内的な要因としては「楽しかったから」が一番多く、「作るのも売るのも楽しかった。」「準備は大変だけど、その分やり遂げたときの達成感が心地良かった。」「今回の経験から習ったことで次回もっと良いことをしたいから。」「またみんなで協力し、目標を作り、成し遂げたい。」「成長できる。」「級友との仲を深めたい。」

B．部活動（外的な要因）

外的な要因としては主に部活動でした。「サークルの一員としてステージに立ちたいから。」「3年間部活を続けるつもりだし、学園祭が楽しいから。」「2年次もやろうということに友達と決めています。」

この質問に対して51名のうち7名が今後このようなことに参加しないと答えました。理由としては「してもいいが、今回でぶつかり合ってしまった人がいる。もうこういう思いはしたくない。」2名が「準備は大変だったから」。ほか2名は「来場客が思ったより少なかったから。」「規模が小さい。」「思った以上に盛り上がり欠けるから」「楽しかったけど、やはり大変だと思った」でした。

まとめ：

考え方によって今後に対する見方が違います。ポジティブに考える学生が「大変だったけど、楽しかった」に対し、僅かな回答ですがネガティブに考える学生は、「楽しかったけど、大変だった」という理由で今後は参加しないほうを選択しています。

4．Christmas Talent Show

2015年12月16日（水）国際キャリア学科（ICD）2015年クリスマス・タレントショーを企画しました。日本人にとって、先輩後輩の関係は思わぬ力を発揮します。国際キャリア学科は昨年度に開講されて、現在は2年生と1年生しかいませんので、通常の授業では出逢う場面がありません。タレントショーでは合同で開催し、出会いの機会を作りました。

授業を通して、学生の個性や特技を見てきていたので、それぞれの学生が

できそうなことを提示し、集団のリーダーを指名しました。司会者となる1年生3名と2年生4名が総責任者として、それぞれ部門のリーダーと話し合い、プログラムを作りあげていきました。結果的には1年生と2年生、教職員合わせて90名がタレントショーに参加しました。

① 参加した場合はどんなことをしましたか。

- A．ダンス B．歌 C．楽器演奏 D．クイズ E．笑番組
F．ファッション・ショー

② 参加しようと思った理由は何でしたか。

「とても楽しそうだったから」という答えが最も多く、その他具体的には「5月のチャリティ・コンサートで盛り上げることできたから、またみんなと協力しながら成し遂げたいと思ったため。」「内気で前に出たいけど恥ずかしいと思う自分を変えたいと思った。」「先輩との交流もあるし、同年代の子たちも個性的で面白いから。」「学科の学生がせっかく企画し、力を入れて準備されていたので、現場で応援しようと思った。」「先生に「責任者」という立場を任せてもらえたから」というのもありました。教員の後押しがやる気を引き出しています。

③ 参加した後自分にどのような変化を感じましたか。

それぞれ参加することを通して、自己肯定的な感想がたくさんありました。「自分に自信を持てるようになった。」「周りのみんながたくさん新しいことに挑戦しているので刺激になった。」「頑張っている先輩たちをみて、こんな風になりたいと思った。自分のできないところに気付いた。もっと頑張ろうと思った。」「企画してくださった先生方や準備してくれた先輩、友達に感謝の気持ちを持つようになった。」「ICDがすごく素敵な学科だと分かった。大学に来てよかったと思った。」「

④ 今後同じような活動に参加する理由は何ですか。

「とても楽しかったから。」「とても思い出に残ったから。」「皆で協力して行うことはとても楽しいから。」など予想通りの理由が最も多くでした。「皆が仲良くなれるチャンスだと思う。」「普段見ることができない友達のパフォーマンスを見ることができるから。」「皆で一つのものを作り上げてみたい。」「まだ知らない自分の力を探りたい。」「毎回このような行事に参加して、自分に変化を与えたいと思う。」「輪を広げたいし、皆を楽しませたい。」「

まとめ：

チャリティ・コンサート、チャリティ・ヨガ、葡萄祭では、積極的な学生が舞台に出ましたが、このタレントショーは消極的な生徒も含めてできる限り多くの学生に達成感を感じさせることを目標としました。そのため、学生との交流や授業中の観察に基づき、出演メンバーと責任者のある意味で“強制”しました。各学生ができることや得意なことを把握したうえで指名しました。「出る杭は打たれる」症状は若者の中にもしっかり根付いている日本社会では、上司（この場合教師）からの背中押しは、チャンスを掴むきっかけです。1度目の成功体験は2度目の自信につながります。

5．他の活動

上記の学内のイベントを除いて、学生がそれぞれ各自に参加した社会活動もいくつかありました。

① 参加した場合はどんなことをしましたか。

学内のイベント以外に学生が各自に参加した活動もいくつかありました。一つはNGOの一環でカンボジアの孤児院に行って体験・援助を行われました。ほか、福岡県国際交流センターの催しもの・ポリビアへの派遣、九州で行われたJETRO Food Expo .の参加、留学生がKiddycat という日本人の小学生向けのパーティにボランティアとして英会話をしながらいろいろなゲームをするという活動もありました。

② 参加しようと思った理由は何でしたか。

理由は様々でした。「ある先生が「学校の外で勉強できることがたくさんある」とおっしゃっていたのを確かめたかったから。」「発展途上国の様子を見たいと思ったから。」「社会勉強のため。」「ぼーっとしてられないと思ったから。いろいろな人と出会って、いろいろなことを学ぼうと思ったから。」「留学生の場合は「子供が好きで勉強と一つの経験にもなれるように遊びたかったです。」

③ 参加した後自分にどのような変化を感じましたか。

「東南アジアの国にもっと興味を持つようになった。」「以前よりポジティブに考えるようになった。」「感謝することを知った。」「人との出会いの素晴らしさを知った。」「自分のしたいことが少しわかった。もっと海外に出たいと思った。」「締め切りまでに何としてでもミッションを達成（具体的にいうとパワポ、

司会原稿作り)するぞという思いを持てるようになった。大勢の前でゆっくりはっきり話すことが少しだけできるようになったこと。」「言葉づかい、姿勢、会社の雰囲気を味わうことができた。」「もっとプレゼン能力を上げようという気になれたし、またアルゼンチンだけじゃなくて他の国についても調べてみたいと思った。」「自分から何かに参加する(自主的に)ことに対して少し前向きに(プラスに)考えられるようになった。また留学生と友達になれた。」「留学生は「日本人の小学生とネパールの小学生との違いが分かって、日本の教育の仕方もわかりました。」

④ 今後同じような活動に参加する理由は何ですか。

「世界の現状についてもっと知りたいから。」「今後は自分から発信していけるような存在になりたいから。吸収したものを人に伝えたい。」「もっともっとさまざまな国を自分の目で見たいと思う。」「こういう活動をしてくださることで普段のみんなとは少し違う意外な一面が見れたり、自分自身の成長にもつながるので、とてもありがたいです。」「ICD に入ってつくづくよかったと思います。毎日とても充実しています。いろいろな経験をさせてもらえてとてもたのしいです。」「様々な会社を知り、将来の自分のために今できること経験をし、学びたい。」「自分の力を発揮できるいい機会だから。」「自分ができる英語を使ってボランティアなどしたら経験を積みながら勉強もできるから。」

IV 考察

1. 授業外活動の有効性

大学では、学生は広範囲の地域から集まり、年齢層も必ずしも一致していないので、多様な世界観を持つ人と出会う機会があります。しかし、高校までのホームルームがなくなり、学生は自分で選択した授業単位で移動するので、よほど積極的な性格でない限り、新たな出会いは難しく、授業中の学生間人間関係も、ゼミを除いて、短期的・表面的なものになる傾向があります。企業が求める人と人とを結びつけるコミュニケーション能力を鍛えるためには、学生自治会活動、サークル活動、地域のコミュニティ活動、節度あるアルバイトなど団体に働く体験が必要ですが、これらの団体活動への参加意識は個人差が激しく、個別の学生の成長度合いは不確定です。ここに学科全体で学生の団体活動が見える授業外活動の

有効性があります。

5月のネパールチャリティ・コンサートから始まった様々な授業外活動を通して、授業中には見えない学生の姿が浮かび上がり、半年後の12月のタレントショーでは、どの学生がどのような特技を持っているか、どの学生が寡黙だが影響力が強いのか、どの学生に何を任せると全体が活気づくか、どの学生が人前で表情豊かに話せるようになったか、どの学生が前面に出る勇気を出せないでいるかなど把握できるようになりました。従って、タレントショーに関しては学生の自主性を待つだけでなく、個別の学生に働きかけて、まだ今までに出たことがない生徒を誘い出させたり、教師から指名して役割に付けたり、一人でも多くの学生が舞台へ上がれるようにしました。学生の感想によれば、この教師からの後押しがきっかけになり、聴衆側ではなく演出側に立てて楽しい時が過ごせたらしく、また同じような機会があれば、自主的に参加したいとか、みんなで共同作業する大切さを痛感したとか、自分に足りないところがわかって、もっと頑張ろうと思ったなど報告しています。1年次では体験することが目標でしたが、2年次、3年次ではさらに大きな役割を与えながら、社会に出る前に共同作業を手際よく処理できる人材に育成していければ幸いです。

2．企業が求めるコミュニケーション能力

① 聞く力

コミュニケーション能力という言葉から、話す力と捉える人もいますが、企業が求めるコミュニケーション能力の大半は「聞く力」です。所属する部署の部長や課長が職員に指示を出しますが、その指示が理解できなければ、質問し、行動途中で課長に確認し、最終的には指示されたことを実行に移すことが求められています。団体の構成員がバラバラに行動しては、効率良い利潤追求は達成できません。この聞く力は、授業の中で訓練しています。指示を出す課長の役割が教師で、学生はその指示内容が分からなければ質問し、重要なことはメモを取り、課題は期日を守って提出するという通常の授業がそのままコミュニケーション能力を高める訓練になっています。残念ながら、指示内容が分からない場合に質問する姿勢に欠けている学生がいることです。教師と学生との信頼関係を築き、もっと自由に質問させる雰囲気作りが大切です。

② 意見をまとめる力

この聞く力に加えて、プレゼンテーション能力も重要です。アメリカでは小学生の時から、クラスメートの前に立って発表する機会が多く与えられます。Show and Tellという言葉はアメリカ人にとっては楽しい授業を思い出させます。ある品物を見せて、それが何かを説明するプレゼンテーションです。日本では、先生の説明を聞いて、答えを暗記するのが高校までの授業の中心で、大学になって初めてプレゼンテーションの練習を開始しています。他の人にとって新しい物、意外な物、役立つものを自分で選び、他の人が理解できるような順番で説明することがプレゼンテーション力ですが、高校までの授業に慣れている多くの学生は決まった答えを待っています。原稿を読み上げる暗唱大会には出場できても、自分の意見をまとめるスピーチ大会には参加できない学生が多くいます。留学生を招待する Freshers Seminar を含めて、ネパールやアルゼンチンについて、調べたことを発表する機会を与えました。何を説明するかを選択し、どのような順番で説明し、最後に説明した事柄を印象に残す工夫など、繰り返し練習すれば必ず上達します。

③ 人前に立つ勇氣

自分の意見を組み立てる前に、人前に立つこと自体に抵抗感を感じる生徒が大半です。勇氣ある生徒は、一発ギャグを言って、喝采を受けることはありませんが、実は普段の自分にマスクをつけていることが多いようです。顔を赤くして、言葉が出ない学生も大きな声でまくし立てる学生も、実は根っここの部分で同じ問題を抱えています。人前に立って自分の考えを述べる経験が少なく、舞台では平常心を失っていることです。教師は毎日生徒の前に立って話をしているので、慣れています。学生にも恐怖心を取り除けるように、発表する機会を沢山与えることが大切です。

3. 主体性

「和を以て貴しと成す」精神の日本人は一致団結して物事に取り組む姿勢はよくついています。方向性が示されれば、驚くべき協調姿勢が出て、みんなでやり遂げます。問題は、強い指示がなければ、最初の一步が踏み出せないことです。教師としてかなり長い間、学生の自主性が芽生えるのを待っていました。しかし、待っても待っても行動を起こしてくれず、何も建設的なことをしないまま4年間

が過ぎ、卒業していった生徒を見てきました。学生の自主性を引き出すために、大学1年2年の段階は、少し「強制力」を使ってでも、学生に体験させることが必要です。

主体性とは「自分の意志・判断で行動しようとする態度」です。企業内で言えば、上司からの指示を実行するだけの場合は仕事ではなく作業です。設定されていることだけを実行するロボットと同じです。授業で考えると、教師は30名程度の学生に対して、同じ話をし、同じ指示を出しますが、受け取る学生は資質も性格も能力も違います。同じことをしても、能力の差は縮まりません。同僚と比較して、自分は英語の発音が不明瞭、語彙が少ない、文章構成力が弱い、あるいはビジュアル・マテリアルの使い方が不足しているなど、自分の弱点を把握して、クラス全体の目標とは別に個人の目標を立てて授業に臨むこと、職場の仕事に臨むことが主体性です。自分は楽器を演奏できないから参加しないという決定は、主体的決定とは言えません。自分は楽器が演奏できないけど、料理ができるから、ケーキを作って参加した生徒は主体的な行動をしています。ダンスはできないけど、書道で「夢」という文字を書いて、留学生を激励した生徒は主体的な行動をしました。

4．チャレンジ精神

チャレンジ精神も多くは授業で訓練しています。できなかった事ができるようになる、理解できなかった概念を理解できるようになる、話せなかった英語が話せるようになるために、努力することがチャレンジ精神です。大学で取り扱う事柄は、高校までの授業のように、明確な答えがないことが多くあります。本稿で取り上げた授業外活動の大半は、このチャレンジ精神を育むことを目的としています。

チャレンジ精神は持って生まれた性格ではありません。訓練して身に付けていくものです。小さな成功体験が次の課題へ向かわせる推進力です。そして、チャレンジ精神を掘り起こしていくのは個々人の意志力ではなく、周りの環境です。新しいことをやってみようとする人が少ない集団に所属すると、チャレンジ精神は生まれてきません。やってみようとする人が多い集団に所属すると、自分もやってみようという気持ちになります。チャレンジ精神で最も大きな障害となるものは持続力です。今日はやる気になっても、翌日にはやる気がなくなるかもしれま

せん。しかし、やってみようとする人が多い集団にいれば、やる気をなくした時でも、周りに影響されて、もう一回立ち上がって挑戦しようという気分になります。1年生は、やる気を起こす集団になりつつあります。

5．新たな行動目標

来年度に向けての授業外活動としては、チャリティ・コンサートはありませんが、新たな留学生が加わります。異文化の中で生活している留学生を励ます会を設定しましょう。葡萄祭にももっと参加させましょう。タレントショーも計画しましょう。2年時の課題は、同じイベントを実施する時に、1年時とは別の目標を立てさせることです。同じダンスや楽器演奏をするにしても、曲の選択や聴衆への説明の仕方を工夫する、あるいは独奏を合奏にしたり、ダンスのメンバーを追加したり、新たな形式で挑戦させましょう。1年時には舞台上に立たなかった学生にも、完成度は低くてもいいから、人前に立つという目標を立てさせましょう。葡萄祭には来年は参加しないと答えた学生がいます。「今回ぶつかりあった人がいて、もうこういう思いはしたくない」、「思った以上に盛り上がり欠けるから」というのがその理由でした。なぜ意見が食い違ったのか、改善する余地がなかったのか、盛り上がり欠けた原因はなんだったのか、どうすればもっと盛り上がるのかを考えることが次の行動力となります。

・本研究は日本コミュニケーション学会九州支部第23回年次大会で発表された。

